



SARTOR RESARTUS

THE LIFE AND OPINIONS OF
HERR TEUFELSDRÖCKH

BY

THOMAS CARLYLE

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

KÔCHI DOI

PROFESSOR OF ENGLISH LITERATURE IN THE TOHOKU IMPERIAL UNIVERSITY



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



大正十一年一月七日印刷
昭和三年七月二十日印刷

大正十一年一月十日發行
昭和三年七月廿五日訂正三版發行

主幹者 岡倉由三郎

主幹者 市河三喜

發行兼印刷者 小酒井五一郎
東京市麴町區富士見町六丁目五番地

印刷所 研究社印刷所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發行所 研究社

東京市麴町區富士見町六丁目五番地
電話九段四〇二・四〇三番
振替口座東京二八六〇一番



非 賣 品



序

註釋の仕事をひさまづ終つて後、されだけ讀者諸君のためを計り得たかを考へてみるまことに慚愧にたへぬ。私は讀者諸君が辭書を用ひる勞を全部省き得たとは思はない。本書には目刷れぬ語が随分多いので、それを悉く採録したならば註釋は少くとも二倍の頁數に達したであらう。それ故私は普通の英和辭書を見れば意味が明瞭になるやうな語は多くそのまゝにし、故事、熟語、固有名詞及び難解の語句等を説明し、それぞれの専門的な辭典、或は彪大な語學辭書を繙く勞を除いたつもりである。思想の註解として私のなし得たことは一層僅少で且つ皮相である。本書は普通の衣裳から、肉體衣、社會衣、著者の半生涯の記録として示された精神衣、時間空間の衣裳を通じて實在の真相にまで讀者を導かんとするものであるが、本書を書いた頃著者の思想は醱酵の状態にあつて、明晰な論理的の姿を得て居なかつた故、著者はかかる思想の旅に讀者を導くべき橋を架したのでなく、斷片的な暗示の筏を浮べたのみである。本書を徹底して理解せんすれば、著述を通じて著者の心を統一して見るのみでなく、歐洲思潮の流に棹さゝねはならぬ。拙い Introduction 及び註釋の部に於ける各章の内容見出しが本書の思想を統一して考へんとする諸君に多少の参考になれば幸であるが、これは一つの管見に過ぎないものであつて、他に種々の見方が可能であらう。著者が提出したところのものは人生の中心問題であり、自我の問題である故に本書の理解はさうしても讀者自身が眞剣に考へ、自ら創造することによらねはならぬ。

本書の註釋に關しては主幹の兩君が懇切なる校閲訂正の勞をされたのみならず、市河君は親しく筆をこつて多くの必要な解説を書き加へられ、校正が終つた後更に本書を讀み返し説明を附すべくして脱漏したものを集め『補遺』として加へられた。こゝに謹んでその好意を謝する。

大正十一年一月

土居光知

INTRODUCTION

Carlyle は 1795 年十二月四日スコットランド南部 Dumfries 州 Annandale 地方 Ecclefechan 村に生れた。父 James Carlyle は嚴肅な石工で、母 Margaret は優しく愛情深い婦人であり、そして四人の第五人の姉妹と共に質素な家庭に育つた。1809 年にエディンバラ大學に入り、始めは Humanity (Latin) Class に學び、二年目から數學と論理學を主要學科として修め、四年目には物理學を加へ、1813 年の夏 M. A. degree を取るこゝなく卒業した。彼は學校には感激も興味も見出さなかつたらしく、後に同大學の總長になつた時の就任演説にも、大學の私のためになつた點はそれが讀書することを私に教へたことであると言つたやうに圖書館で自由に讀書したこゝの結果が多かつたことを信じてゐた。このこゝは 104 頁 26 行以下に次の如く述べられてゐる。「私は無秩序な書庫のうちから館員も知らぬやうな書籍を探し出して讀んだ。文學的生涯を送るやうになつた基礎はかくして作られた。私は自力によつて殆んどすべての文化を有する國語を自由に讀み得るやうになつた。私は科學その他あらゆる部門の書を讀んだが、人間が人間にまつては常に研究の主要な題目である故に、思索の特性を讀み、書かれた物から書いた人を解釋することが私の好む仕事になつた。人間性と生活のある基礎的概念が私のうちにおのづから出來かけてきた。そのこゝは當時物質及び精神的の世界が私にまつては尙機械であつたことを考へるさかなり驚くべきこゝであつた。」この讀書の態度が彼の批評の態度の基礎となつたのである。

彼は大學に於いては熱心に數學を學び、幾何學を最も高尚な學

間であるを考へ、卒業するや Annan Academy の數學助教師となつた。しかし彼が數學を學んだのは天性から文學以上にそれを愛好したためではなく、たゞ漠然として本質を捕捉し難いものに満足することができぬ彼の性質が確實な眞を求むる學問即ち數學、論理學、物理學等に彼を向はしめたのであらう。1820 年彼を知つた Chalmer は「Carlyle は眞を愛する以上に眞摯を愛してゐる」と言つたが、數學はやがて彼の心を満さなくなつた。彼は五年間の教師生活によつて貯へ得た九十磅をもつて、學校教師をつゞけるよりは餓死する方がよいと思ひながら 1818 年にエディンバラに歸り、家庭教師をし、化學や地理書の翻譯までして生活費を補ひながら、適當な職業を見出さうとした。彼は牧師にならうとし、次いで法律家にならうとしたが、少しくその内部を見るに彼は耐へ難き職業である様に思はれ、ある時は亞米利加に移住せうかとも企てたのである。1818 年から 1822 年に至る四年間は生活の不安に脅かされ、胃病になやみ、精神の純一さを失はむとし、生存の意義を見出すことができずして青年の時期が徒らに空費され盡さうとしてゐるを思ひ、焦燥と彷徨のうちに過ごした、彼の最も暗黒な時代であつた。

1822 年の春に Charles Buller の子供の家庭教師として年二百磅を受けることになり、始めて時間の餘裕を與へられた。彼は 1819 年から鑛物學を讀む目的で獨逸語を學び始めたのであるが、それが Schiller 及び Goethe を讀む動機となり、遂に彼を文學者たらんと決心せしめたのである。彼は 1823 年から *Life of Schiller* を書き始め、一部つゞ *London Magazine* で發表し、次で“Faust 評論”を *New Edinburgh Review* に寄せ、1824 年には *Wilhelm Meister* を翻譯し、それによつて得た原稿料百八十磅を以てロンドンに行き文學者の仲間入をせうとしたが、ロンドンの文學者は彼に好意を示すことなく、ここに De Quincey を始めし評論家は

Wilhelm Meister を罵倒したので、彼は不快な感じを抱いて 1825 年三月蘇格蘭に歸り、Hoddam Hill 及び Edinburgh に住み *Jean Paul Friedrich Richter* (1827 年六月)、*State of German Literature* (1827 年十月)、*Life and Writings of Werner* (1828 年一月)、*Goethe's Helena* (1828 年四月) 等の評論をかき、Tieck, Musæus, Richter の小説を譯し *German Romance* の名で出版し、1828 年四月から六年間最も荒涼たるヒイスの岡にある、Craigenputtock の一軒家に退き *Signs of the Times* (1829 年六月)、*Novalis* (1829 年七月)、*Sartor Resartus* (1830 年一月——八月) *Characteristics* (1831 年十二月) 等を書き、讀書と冥想のうちに思想家として立つ最後の準備時代を送りつゝあつた。

Carlyle の文學者としての生活は (1) 彼の心をめざまし、最も意義ある生活を啓示するやうに思はれた文學の批評から始め、(2) これによつてめざまされた感想の綜合としての人生觀を發表し、時代精神を批判し、(3) 進んで歴史的の事件及び當時の社會問題の批評に赴いたのである。時代の徴候及び特性を論じた *Signs of the Times*, *Characteristics*, 彼の人生觀の表現である *Sartor Resartus* は第二期に於ける最も重要なものであつて、これを合せ讀めば著者の精神を一瞥することができる。

彼の人生觀の中心思想は *The Everlasting No* 及び *The Everlasting Yea* の二章に述べられてゐる。*Sartor Resartus* の第二卷は象徴的な覆面をつけた自叙傳であつて、第一章には主人公の生ひたち、第二章には楽しい少年時代、牧歌的な自然の影響と父母の感化とを叙してゐる。彼は嚴格で質素な、すべての高貴な精神的果實を育てる深い眞摯な氣分のみちた家に育てられ、父母から従順、特に信仰深い母から敬虔の心を植ゑ付けられた。Carlyle はこの二つの徳を高貴なる精神の基礎的なものとした (90 頁 10 行以下、173 頁 21 行註、213 頁 15 行より 20 行、218 頁、229 頁以下、

231 頁等参照)。これ Carlyle が一時民衆主義に近づきながらもプラトンの精神的貴族主義に傾き、英雄崇拜を説き、獨逸の哲學思想に共鳴するやうになつた一理由であらう。

第三章は學校生活を叙してゐる。當時の大學は常識に基く實證的精神が支配し、合理的、分析的であることを誇りとし、理想主義を排斥し、死語の詰込、形而上學の言葉争、科學の語を妄用する知識の機械的な操縦のみが行はれ、熱誠な青年の心は懷疑に陥るか自己欺瞞に赴くかいつれかであつた。第四章は卒業後の目的も休息もない彷徨の生活が叙せられてゐる。この時期に彼は Margaret Gordon といふ少女を知つたのであるが、Margaret は位地のある人と結婚した。この頃の感想は第五及び六章の内容をなしてゐる。カーライル傳の著者 Froude は Margaret が本書の Blumine であると推定してゐるが、これには異説があつて、Carlyle が家庭教師をしてゐた Buller の親戚の Catherine Aurora Kirkpatrick が Blumine であると云ふ説があり、また Carlyle は Margaret, Catherine 及び妻の Jane を一つにして理想の少女を描いたとも想像されてゐる。この説が最も眞に近いやうである。

かくの如くして彼は教育によつて信仰を失ひ、若き心が望む凡てを拒絶せられ、運命に翻弄されて十數年を過し、自殺からは唯基督教の餘光によつて支へられ、無意義な生活を機械的に續けてきた。そして世間を見るに、そこには損益哲學 (Profit-and-Loss Philosophy) が支配し、人々は幸福を人生の目的とし、自然を眺めるにそれは神でも惡魔でもなく、全く無意味な、生命を吞吐する怪物であるやうに感ぜられた (152 頁 18 行より 25 行)。彼は人世に對し宇宙に對しその價值を問うたが、自分の聲の反響の外には何等の答を得なかつた。

その時彼のうちには尙眞理を愛する心と義務を感じる心が残つてゐた、しかしかかる状態に於いてはその心を遂行してゆく力が

なかつた。彼は弱きこそ眞の悲慘であることを感じた。彼は自己に自信を有することができず、懷疑のうちの最も面倒な自己懷疑に陥つた。自信は行爲によつて始めて生ずる、渾沌として内に感ずる力は行爲によつて始めてその姿を現はす。行爲は精神が自己の本質を見る唯一の鏡である。無爲にして己を知ることとは不可能であつて、己を知れといふ格言は「己のなし得ることを知れ」といふことにして始めて可能の道がひらけてくる。「己のなし得ることを」を如何にして知るか。最も手近にある義務を遂行せよ、しからは次になすべきことが明かになるであらう。これ彼が自己懷疑と絶望とにうち克たんとした道であつた。

彼が神も悪魔も信ぜず、人生に何等の希望も光明も認め得なくなつたとき、愛と喜をなくすると同時に怖をもなくし一種の強を得たかといふに、さうでなく漠然たる恐怖に襲はれ、怯懦になり、戦慄し、萬物が彼の心を傷けんとしてゐる如く、天地が巨大な怪物の顎であつて、彼を呑みこまんとしてゐるやうに感ぜられ、彼は絶對不眠の三週間を過したこともあつた。この時彼の精神は最後の勇氣を奮ひ起して、「汝は何を怖れるか、何故に卑怯者の如く泣事を云ひ畏縮してゐるか。汝の前にある最悪なるもの、全體が如何程であるか、死か、地獄の苦しみか、悪魔と人間が汝を害し得ることか、汝は心情を有せぬか、そしてそれに耐え能はぬか、そして自由の子として汝を苦しめる地獄を脚下に蹂躪することはできぬか」と尋ねた。かく尋ねた時全精神に一條の火がほこはしり、卑怯な怖れを一掃することができた。これは 1821 年六月二二日に著者が経験した同心の事實である。

これは心情の自由を否定する機械的人生觀即ち永遠の否定に對し自我の全力を以てした反抗であつた。この機械的な人生觀を彼は時代精神として *Signs of the Times* のうちに述べてゐる。その大意を述べやう。現代は英雄的、奉仕的、哲學的、道德的の反對の

形容詞でよぶことを得るが、また機械的な時代を名づけることができる。産業に於いては到る所に手工は驅逐され、工場の機械的産業となり、労働者の個性或は人格は無視され、社會制度まで機械的に組み立てられ、富は非常に増加したが一部の人の所に集まり貧富の懸隔が甚しくなりつゝある。單に物質的のことが機械によつてなされるのみならず精神的のこともまた機械的になされつつある。教育に於いても個性は重んぜられずすべてが事務的に行はれる。また社會に於いては單獨では何もできず、生活するにはある組織に入るか、自ら組織を作るかしなければならぬ。また學者の思索に於いても學會、研究所、調査會萬能の時代であつて孤獨の直觀的な思想家は認められなくなりつゝある。従つて精神科學は衰へ自然科學のみが認められ、英國哲學者は Locke, Hume の時代から物質的懷疑的であつたが、今は無神論、宿命論、不可知論となり、それをも世人は省みずして、Hartley, Darwin の時代となつた。また道徳も犠牲奉仕の如き英雄的精神を失ひ Bentham の功利主義となり最大多數の最大幸福の原理の外に道徳を認めない。世間を支配する思想は因果哲學或は損得哲學であり、人は生ける靈ではなく、苦樂計量器 (Pleasure-and-pain-measuring Machine) であるかのやうに、世界は巨大な工場であるを考へられるに至つた。政治もまた機械化され、政府は國民を高貴な生活へ指導するものではなく、個人の利己的な欲望を出来るだけ多く満足さす機關とせられ、政治の主義は利害關係に基いてなされる投票の數によつて定められ、投票數の多數に従ふことが正義でありまた自由であるを考へられるやうになつた。また文學に就いて言つても驚異心や感激は涸渴し、自然と人間との深い無限の調和を歌ふことは忘れられ、精神的なもの、誠實なるもの、純潔なるものゝ代りに官能的なもの、刺戟の強いもの、戰慄を催さずやうなものが喜ばれる。創作も意識的に行はれる。かゝる機械觀が人心の根柢にまで滲透し

て信仰や敬虔の情が失はれた。Hume は *Natural History of Religion* を公けにし、宗教は人の靈が宇宙の靈即ち眞善美の不可思議な源泉に對する渴仰と讃嘆とをせずして迷信や錯誤から發生したものとしたのである。

かゝる機械觀が Carlyle のいふ永遠の否定である。彼は學校生活の初めからこれに對し内的生命の反抗を感じたのであるが、この機械的な思潮は疑ふことのできぬ確實なものであると信じ、父母によつて選ばれた神學を捨て、數學物理學等を學び、感覺論、唯物觀、無神論は避くべからざる結論であると考へ、この機械の構造を知らうとし自己の心情を殺さうとしてゐた。然るにこの機械觀に反抗する心情の衷心の叫びは根柢のないものでなく、眞の私の聲であつて、かの機械觀よりも一層深い、否定することのできぬ、實在性をもつてゐるものであることを悟つたのである。

この Carlyle の回心に際しその思想に基礎を與へたのは、時間空間は實在でなく直觀の様式であつて、時間空間のうちに神があるのではなく神のうちに時間空間があるとした Kant の純粹理性批判の考へ(48 頁 23 行、187 頁 21 行、238 頁 15 行、239 頁 25 行等参照)と、自我の自由なる實現の生活を實際に示し世界を生命あるものと觀じて自然を神の生ける衣裳であると歌つた Goethe の思想(49 頁、172 頁 19 行、245 頁 20 行)とである。これ彼が Kant 以後の哲學を研究し、Goethe の文學を讃嘆した理由であらう。そして *Characteristics* の中でこの機械的世界觀を批評するに當つて、Carlyle は Kant と Goethe の思想を融合せんとした Schiller の考へ方に近づいた。私はこの論文と Schiller の *Ueber naive und sentimentalische Dichtung* の基礎になつてゐる思想との間に一致があるやうに思ふ。

永遠の否定から永遠の肯定に進む道は思想及び生活を生命の源にかへし、あまりに解剖的になり、損得苦樂に自意識的になつて

あることから無意識の全體にかへるやうにすることである。健康の人は健康を考へず、病人が健康に就いて自意識的である。健全な精神に於いて部分が全體のうちに統一され、純一な生活をなしてゐる間は自意識的ではない。實際充實され統一された状態はすべて聲なく、もしあるとしてもそれは音樂的な諧音であつて、鋭く高く鳴るは不調和と不満の徴である。自意識は生活が分裂し互に矛盾する所から起る。近代はかゝる自意識になやんでゐる時代である。されば自意識は生命の根元的な創造の活動ではなく、分裂の結果による部分的な活動である。我々が自意識的に支配し得る生命の領域は極めて狭く、理解し計畫し得る人生の部分は機械的な表面にすぎぬ。生命の本質は無意識の中に活くる力である。眞に強い精神は知的、道德的その他いづれの點から見ても、自分の力を意識し誇る精神ではない。機械的なものは表面にあらはれるが眞の力と命とは現はれぬ。思惟に就いて考へても、論理的に整へ得るものは外面的なものであつて、議論や推論の下に直観がある。この沈黙の不可思議な深淵のうちに生命の力が住み、こゝに於いて精神的創造がなされる。製造は小さきもの、意識的にされるものである、創造は偉大にして意識的にはされ得ないものである。眞の理解は分解的ではなく直観的なものである、説明し證明することなく、信じかつ行ふことでなければならぬ。(本書第三卷三章に於いて沈黙を讚美し象徴の偉大さを説いたのはこの考へからである)。

上にのべた如く永遠の肯定への道は抽象的な論理の道でなく、自意識的な分析的な意識から、沈黙のうち無意識のうちに潜み、直観の力を鋭敏にし、損得苦樂の標準によつて生活をなすことから理性を眞に自由ならしめ、それに宿命の如く従ふことである。彼は當時の形而上學に反對し、形式論理よりも直観に重きを置き、自然科学の研究に於いても機械的な方法のみでは不充分であつて直

觀に俟つ所が多く、發見は調査會や研究會よりも Kepler, Newton, Watts 等の天才的個人によつてなされることが多く、教育、經濟及び社會問題の如きも機械的に數量的に解決すべきものではなく、個性を尙び、人間性の基礎の上に解決を與へるべきことを主張したのである。

Carlyle は欲望、特に快樂や幸福を望む心は眞に自我の基礎でないことを思ひ、一層根元的な我にかへり、眞我實現の努力にいそしむことによつて、感傷的な心、希望や欲望の主體である我を超越すべきことを説いた。彼が第二卷第八章に題した *Centre of Indifference* さはこの自我超越の境地を云つたものであらう (171 頁 2 行)。永遠の否定をは自我が非我をどこまでも否定する意味にも解されてゐるが、否定も肯定も共に主觀的自我の強調ではなく、この肯定は主觀的自我の超越によつて、普遍的精神の自己示現として、神の愛としておのづから實現されるものである (176 頁 21 行)。Carlyle は幸福の愛が彼の焦燥憤激苦惱矛盾の源であつたこと、また功利的快樂説が當時の人生觀の基礎をなしてゐるのを見、社會の禍根がこゝにあると信じ、この人生觀は人間最高の興味を包有することが不可能であつて、歴史的事件でも個人的事業でも眞の偉大さを有するものは一つとして個人の幸福を求むる動機から仕遂けられたものでないことを説いたのである。この幸福を基礎とする人生觀を超越するとき利己的な欲望に遮られてゐた理性と愛とが自由にされるを感じた。こゝに生命の一層根元的なものが活き出し、それを行爲によつて實現することが眞に生きることであること、また不健全な自意識や感傷的な心持は唯かゝる自我實現の行爲によつてのみ超越せられ得ることを信じたのである。これ彼が「汝の努力を愛のうちにあらしめよ、汝の生活を活動の生活たらしめよ」或は「人生は休息にはあらず、汝の生命を活動に次ぐ活動たらしめよ」と歌つた Goethe また自我及び人格の

活動性、及び自發性の活動を説いた Fichte に私淑し、また本書 208 頁に労働者に對し最も高い尊敬の言葉を捧げた理由であらう。

Carlyle の時代は活動よりも反省に傾いてゐた時代であつて、當時の思想家は思想から行爲の世界へ進んでゆく道がないことに悩んでゐた。當時の小説を見ても自己展開の純粹な行爲の世界へ進んでゆくことができぬために失敗してゆく人生が多く描かれてゐる。Carlyle の永遠の否定を背景にした永遠の肯定の思想は、この時代の苦悶を完全に解決したものでないにしても、その道を示し、若い人々の精神生活に最もよき刺戟を與へ、新しい思想の酵母となり、英國に於ける十九世紀後半の詩人や思想家に深い感化を與へたのである。J. C. Robertson が Carlyle を批評して「彼は疑ひもなく十九世紀の英文學に於ける強い道徳的の力であつた」といつたのは適評であらう。

以上は *Sartor Resartus* の第二及び第三卷に述べられた根本思想であるが第一卷の調子はかなり異なつてゐるのである。このことは本書の書かれた境遇から説明される。1830 年六月に妹 Margaret が死んだのは傷心のことであつた、當時彼は almost ghastly solitude と自らよんだ程荒涼たる友人もない所に住んでゐた。同年七月十二日に “I am going to write—Nonsense. It is on ‘Clothes.’ Heaven be my comforter.” と日誌に書いた。かくして出来上つたのは第一卷であつて、それは奇想、諧謔の一編であつた。彼はそれを *Fraser's Magazine* に送つたのであるが掲載を拒絕せられ返送された。こゝに於いて彼は自叙傳風のものを書き添へ、更に第一卷と同様な形で彼がその時まで考へた思想の心髓を集めて表現し心血を注いだ單行本として公にせんとした。彼はロンドンに行き出版者を求めたが、その價值を認めるものがなく二年間原稿のままで置かれ、1833 年十一月より翌年八月まで *Fraser's Magazine*

に分載された。しかし當時の人はこれを冷眼視し或は嘲罵を試みる者が多く、それが天才の著述であることを認めたのは殆んど妻のみであつた。しかし 1836 年に亞米利加の賞讃者が出版し、更に二年後英國に於いて始めて出版され、年を経るに従つてその眞價が漸く認められ、Carlyle の傑作として、彼の作中最も愛讀されるやうになつたのである。

Sartor Resartus の註釋書

Carlyle: *Sartor Resartus*. Edited by Archibald MacMechan.
(Athenæum Press Series. 1896.)

Carlyle: *Sartor Resartus*. Edited by P. C. Parr. (Oxford.
Clarendon Press. 1913.)

Carlyle: *Sartor Resartus*. Edited by Rev. James Wood.
(London. J. M. Dent & Co. 1902.)

本書の註は故事及び引用句の註に關して特に前二書に負ふ所が多いが、我々にまつて必要と思はれる字義及び思想上の註を多く加へたのである。

主要な著書及び參考書

Works. Ed. with Introduction by H. D. Traill. (Century edn.)
31 vols. 1897-1901.

Wilhelm Meister's Apprenticeship and Travels. 3 vols. 1824.

The Life of Schiller. (Originally published in *The London Magazine*, 1823-4.) 1825, 2nd edn. 1845.

German Romance. 4 vols. 1827.

Sartor Resartus. Boston. 1836, First English edn. 1838.

A History of the French Revolution. 3 vols. 1837. (With Introduction and Notes by J. H. Rose. 3 vols. 1902.)

- Critical and Miscellaneous Essays. 4 vols. 1839, 2nd edn. 5 vols. 1840.
- Chartism. 1839.
- On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History. 1841.
(Ed. by MacMechan, Boston. 1901. Ed. by Parr, Oxford. 1910.)
- Past and Present. 1843.
- Oliver Cromwell's Letters and Speeches. 2 vols. 1845, enlarged second edn. 3 vols. 1846.
- Latter-Day Pamphlets. 1850.
- Life of John Sterling. 1851.
- The History of Friedrich II. of Prussia. 6 vols. 1858-65.
- Reminiscences. Ed. J. A. Froude. 2 vols. 1881.
- Correspondence of Carlyle and Emerson (1834-72), 2 vols. 1883.
- Correspondence between Goethe and Carlyle. Ed. by C. E. Norton. 1887.
- Love Letters of Carlyle and Jane Welsh. Ed. by A. Carlyle. 2 vols. 1909.

傳記及評論

- Froude, J. A. Carlyle: History of the First Forty Years of his Life (1795-1835). 2 vols. 1882. New edn. 1890.
- Froude, J. A. Carlyle: History of his Life in London (1834-81). 2 vols. 1884.
- Garnett, R. Life of Carlyle (Great Writers series.) 1887.
- Nichol, J. Thomas Carlyle (English Men of Letters.) 1892.
- Roe, F. W. Carlyle as a Critic of Literature. New York, 1910.